

Pinhole Blender 120

遠藤 志岐子

右の写真を見てこれがカメラだとわかる人がいったい何人いるだろうか。銀色の丸い缶はまるでクッキーが入っているようだ。上部に2つの黒いつまみがなければクッキーが入っていることを疑う人はいないだろう。しかし、これははっきとしたカメラ。この銀色の缶はPinhole Blender（日本総代理店：エー・パワー）という名前で、アメリカで販売されているピンホールカメラなのだ。

一見するとおもちゃのように見えるこのPinhole Blenderはブローニーフィルムを使い、6×12cmという少し通常よりも横長のピンホール写真を撮ることができる。しかも、このPinhole Blenderには、ピンホールが3つ空いている。この3つの穴を駆使することで、さまざまな表現のピンホール写真を撮ることができる。

直径18.0cm、高さ6.7cmの大きさは、実物を手にすると写真で見ていたよりも大きい。しかし缶なので当然軽い。ピンホール径はそれぞれ0.3mm。F値は200。底部には三脚穴もある。それぞれのピンホールにはシャッター代わりにシートマグネットが装着されている。簡単な露出ガイドが書かれたシートマグネットも付属されているので、本体のどこかに貼っておくと撮影時に便利である（写真2、3）。

フィルムの装填

蓋を開けると真っ黒に塗られた内部の中心に円筒形の方が設置されている。この円筒形にフィルムを沿わせて使用する。フィルムの装填は若干コツがいるが、慣れれば簡単にできるようになる（写真4）。

フィルムを装填して右側のスプールにスタートの矢



写真1 Pinhole Blender 120

大きさ・重さ：18 × 6.7cm、277g 価格：¥14,700 問合せ：エーパワー (04)2923-5234 <http://www.doctor-and.com/>

印が見えたら蓋を閉める。このとき、蓋と本体のつなぎ目をきちんと合わせる事が重要だ。

しっかり蓋をしてフィルム送りのつまみを360°8回転～8回転半回す。この時、右側のつまみを先に少し回してから左を回すと、内部でフィルムが緩み、引っ張るという動きになるので、むりなくフィルムを送ることができる。これで撮影準備は完了。

3つのピンホールで工夫する撮影

まず、作例を見ていただきたい。

作例1の「My hand」は、秋の日本庭園で撮影した。左から池に映るビル、岩をつかむ手、石垣を写している。いわれてみればこの3つだとわかるが、全体に境界線があやふやだ。

つぎに作例2のRailway Bridgeは餘部の鉄橋を撮影した。左は橋脚に寄って撮り、センターはよく見るとはるか上のほうに、鉄橋の線路部分が見える。真下から鉄橋を撮った。右側は、橋脚の土台部分を撮っている。こちらは作例1よりもさらに境界線が曖昧になっているように見える。

Pinhole Blenderは円筒形にフィルムを沿わせることで画面が湾曲する。さらに3つのピンホールからの画像が写るイメージサークルが絶妙に重なり



写真2 シャッター代わりにシートマグネット

pinhole Blender						
exposure recommendations with ISO 100 film						
Bright or Heavy Sun on Light Sand or Snow	Bright or Heavy Sun (Distinct Shadows)	Cloudy Bright (No Shadows)	Heavy Overcast	Open Shade	Within 5 ft of a sunny window	Average Room Light
1 second	5 seconds	15 seconds	45 seconds	45 seconds	3 minutes	3-6 hours
<small>* 45 seconds for backlit close-up subjects <small>— Subjects shaded from the sun but lit by a large area of sky</small> </small>						

写真3 露出ガイド

あっている。とくに中心の画像の大半は左右の画像に混じる割合が高い。これらの点がこのPinhole Blenderの特徴である。この特徴を活かすことを楽しみながら撮影したい。

3つのモチーフを1カットにブレンドすることは、1枚の写真の中で組写真を作るようである。テーマを決め、そのための組み合わせを考える。モチーフを探す。さらに画像の重なり具合を想像して撮る。少々頭を使うことになるが、この過程が実に楽しい。

Pinhole Blenderには作例以外にもさまざま

な撮り方ができる。作例のように3つのモチーフをブレンドし、1枚として撮影するとプロネフィルム120で4カット撮ることができる。この場合1カット撮った後、フィルムつまみを360°3回転~3回転半を回してフィルムを送る。もちろん、フィルム1本分を繋げて走馬灯のように撮影することも可能だ。この



写真4 プロネフィルムの装填



写真5 スライド式に変更したシャッター部分



【作例1】「My hand」



【作例2】Railway Bridge」

場合は360°2回転を繰り返すことで撮ることができる。12回転すると120フィルム1本分になる。また1コマ分を撮ってからフィルム送りを360°2回転だけさせ、Pinhole Blender本体を180°回転させて撮ると1枚の360°パノラマ写真を撮ることもできる。

フィルムの送り方だけでもこの通りいくつかの方法があるので、ぜひ撮り方も、自分なりの工夫を模索してもらいたい。

Pinhole Blenderは当然届いたままの状態でも撮影を楽しむことができるが、シャッターのしくみにちょっと手を加えると、使いやすくなる。最初の仕様はシートマグネットがシャッターになっている。この部分をスライド式のシャッターに替えて私は使っている(写真5)。

ピンホール写真は、ピンホールと、感材と、暗い箱があれば撮れる写真だ。シンプルなシステムだからこそ、創意工夫と想像力の余地がある。このPinhole Blenderもそのシンプルなシステムの中から生まれた、工夫にあふれたカメラで、その描写、スタイル、作品は、つぎの創造力を大いに刺激してくれるものである。

(えんどうしきこ：日本針穴写真協会常任理事、ブログ「はりあなのこころ」<http://hariana.exblog.jp/> サイト運営者)